特集

Empowering Patients and Partners in Care

RSNA 2022

第108回北米放射線学会（RSNA 2022）が2022年11月27日（日）～12月1日（木）の日程で，米国イリノイ州シカゴ市のマコーミックプレイスで開催された。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行やロシアによるウクライナ侵攻など，不安定な世界情勢が続いてはいるものの，会場内では日本からの参加者も多く見られ，登録者数が約3万8000人，Technical Exhibitの出展企業が644社となり，パンデミック前のにぎわいを取り戻しつつあった。このような状況の中，“Empowering Patients and Partners in Care”がテーマに掲げられた今回，患者や家族，医療者に力を与えるために，放射線診療に従事する人々がどのような役割を果たすべきかを考える機会の5日間となった。

「分断」が進む世界の中で医療者の協調が求められる

2022年のRSNAは，日本からの参加者にとって，長く記憶に残るに違いない。2019年12月に中国でCOVID-19が確認されて以降，パンデミックにより世界が混迷する中，RSNA 2020もその歴史の中で初めてバーチャルミーティングだけで行われた。その翌年，日本国内では断続的に流行が起こり，政府の対策などの影響もあって，RSNA 2021への参加が困難な状況であった。また，マコーミックプレイスでの参加者に対しては，ワクチン接種と会場内でのマスク着用が義務づけられるなど，厳しい条件が設けられた。そのため，日本からの参加者は限られたものとなっていた。そして今回，海外渡航・入国の制限が大幅に緩和され，RSNA会場内もマスク着用義務が撤廃されるなど，日本からの参加のハードルが下がり，放射線診療にかかわる研究者・臨床家・技術者，出展企業の関係者が会場に訪れた。

パンデミックで世界が変わる中，2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻により，世界経済はさらなるダメージを受けている。そして，この不安定な情勢を受けて，自国優先主義にも拍車がかかるなど，現代を語る上で「分断」が一つのキーワードになっている。

翻って，医療に目を向ければ，COVID-19により医療従事者同士や患者との結束が強まっている。近年，世界148か国に4万7000人以上の会員を有するなど国際化を進めるRSNAも同様だ。前回の大会長を務めたシンシナティ大学放射線科教授のMary C. Mahoney, M.D.は，President's Addressの中で，デジタル技術を活用して，地域，医療者，患者と協調することが重要だと訴えた。そして今回もその考えを受け継ぎ，テーマには“Empowering Patients and Partners in Care”が掲げられ，患者や家族，医療者に力を与えるために何をするべきか考えるための機会と位置づけられた。

大会長の
Bruce G. Haffty, M.D.

Opening Session Lectureを行った
Elizabeth A. Morris, M.D.

患者の視点に立つことがこれからの放射線診療には重要

初日11月27日に，Arie Crown Theaterで行われたPresident's Address and Opening Sessionでは，今回のテーマに基づき，大会長を務めるラトガース・ニュージャージー州立大学ロバート・ウッド・ジョンソン・メディカルスクール放射線科教授のBruce G. Haffty, M.D.が講演した。“Diagnostic Imaging : Value from the Lens of the Patient”と題した講演の中でHaffty大会長は，医用画像の持つ意義について，患者の視点に立って考えることの重要性を指摘。患者にとって医用画像は確実な診断につながるだけでなく，不安を減らすなど心理的な負担を軽くするものだと述べた。さらに，患者へのインタビュー映像を紹介して，医用画像は患者やその家族にとっても意思決定を支援するものであり，治療効果を確認できるなど幸福感を得ることにもなると強調。このようなメリットを患者にもたらすために，放射線診療にかかわる人たちには医用画像の価値を示すことが求められていると訴えた。

続く，Opening Session Lectureでは，カリフォルニア大学デービス校メディカルセンター放射線科教授のElizabeth A. Morris, M.D.が，患者の視点を踏まえて講演した。Morris氏は，“Doctor as Patient : Imagining Cancer Survival for All”をテーマに，乳がん患者としての自らの経験に触れ，患者とのコミュニケーションをとることの重要性に言及した。また，乳がん患者が今後大幅に増加し「乳がんパンデミック」が起こると指摘し，乳がんのスクリーニング検査の必要性を訴えた上で，放射線科医の果たすべき役割を説明。がん診療における放射線科医の重要性が高まる

〈0913-8919/23/￥300/論文/JCOPY〉

と述べた。

President's Address and Opening Sessionでは，このほかにAmerican Association of Physicists in Medicine（AAPM）会長のJ. Daniel Bourland, Ph.D.とChicago Radiological Society会長のMatthew Harkenrider, M.D.が出席して挨拶を行った。

日本人の発表の２題がMagna Cum Laudeを受賞

RSNAは前回から会期を短縮して6日間から5日間へと変更した。会期が1日短縮されたもののプログラムは充実していた。President's Address and Opening Session以外のPlenary Sessionでは，2日目の11月28日に，医師でありピューリッツァー賞作家でもあるSiddhartha Mukherjee, M.D.による“Three Visions for the Future of Medicine”と題した講演が行われた。また，11月29日には“Designing Radiology for Patients, Communities, & the Planet”をテーマに，ヴァンダービルト大学医療センター放射線科教授のReed A. Omary, M.D.が講演。11月30日には，“Exciting Radiology Game Show : What's Your Emergency? Life in the STAT Lane”と“Machine Learning in Radiation Oncology Clinical Trials and Clinical Practice”が行われた。さらに，12月1日には，RSNA/AAPM Symposiumとして“Together We Can Make A Difference”も開かれた。

このほか，今回のRSNAでは，19分野から900題以上のScientific Paper，1300題を超えるScientific Poster，約1450題のEducation Exhibitがあった。また，300コース以上のEducational Courseが設けられた。

Education Exhibitの会場
Lakeside Learning Center

会期中には，各賞の受賞が発表された。Magna Cum Laudeには20題が選出され，日本人の発表としては，檜山貴志氏（国立がん研究センター東病院）らの“Post-treatment Head and Neck Cancer Imaging : Anatomical Considerations Based on Cancer Subsites”（HNEE-16），黒川真理子氏（ミシガン大学）らの“Clinical Applications of MR Spectroscopy in the Era of Molecular and Genetic Diagnosis and Treatment”（NREE-3）が受賞の栄に浴した。

また，Cum Laudeには43題が選出された。このうち日本人の発表としては，佐々木智章氏（国立がん研究センター東病院）らの“Developments in Lung Cancer -What Radiologists Should Know About the WHO Classification Updates and Developments in Molecular Biology Research”（CHEE-30），山崎誘三氏（九州大学）らの“Dynamic Chest Radiography for Pulmonary Vascular Diseases : Clinical Applications and Correlation with Other Imaging Modalities”（CHEE-66），入里真理子氏（奈良県立医科大学）らの“Clinical And Radiological Features Of Hepatocellular Carcinoma : An Update In The Era Of Systemic Therapy”（GIEE-115），東南辰幸氏（久留米大学）らの“LR-M in LI-RADS v2018 : Non-HCC Malignacies and Atypical HCC”（GIEE-80），高橋宏彰氏（メイヨークリニック）らの“Imaging of Perirenal Retroperitoneal Lymphatic Systems : Anatomy, Function and Conditions”（GUEE-1），五明美穂氏（杏林大学）らの“Clinical Impact of MR Bone Imaging on Head and Neck Diseases”（HNEE-32），馬場　亮氏（ミシガン大学/東京慈恵会医科大学）らの“Advanced Imaging of Head and Neck Infection”（HNEE-46）の7題が受賞した。

にぎわいを見せるグランドコンコース

President's address and Opening Session
会場のArie Crown Theater

644社が出展したTechnical Exhibit

会期が1日短いTechnical Exhibitは，11月30日まで行われた。出展企業数はコロナ禍前に戻りつつあり，会場は活気に包まれた。前回の495社を大幅に上回る644社が出展し，展示面積も約36万4000平方フィート（約3万3817 m^2）となった。このうち124社が初出展であった。

また，特設展示などについては，人工知能（AI）をテーマにしたAI Showcase，3D Printing & Mixed Reality Showcase，Educators Row，First-Time Exhibitor Pavilion，Recruiters Rowが設けられた。ほかに，出展企業によるIndustry Presentationも多数用意された。

＊　＊　＊

今回は，合計で約3万8000人が登録するなど，かつてのRSNAを思い起こさせる5日間であった。そして，この5日間は，新しい時代に向けた放射線診療のあり方を共有する時間でもあった。なお，RSNA 2022のバーチャルミーティングは5月1日までアクセスが可能である。次回，RSNA 2023は，11月26日（日）～30日（木）の日程で，マコーミックプレイスで開催される。大会長は，ノースカロライナ大学放射線科教授のMatthew A. Mauro, M.D.が務める。

＊Technical Exhibitの詳細は，2月号別冊付録「RSNA 2022ハイライト」およびインナビネット「RSNA 2022スペシャル」（http://www.innervision.co.jp/report/rsna/2022）をご覧ください。